

Grand Prize

第25回 大賞 受賞者

エズラ・F・ヴォーゲル Ezra F. VOGEL

●米国 / 社会学



市民フォーラム

激動の東アジア、今、そしてこれから ～エズラ・ヴォーゲル氏からの提言～

■開催日/2014年9月17日(水) 19:00～21:00
■会場/エルガーラホール8F 大ホール
■参加者/350人



<第一部 基調講演>

相手の立場を考え、衝突を避ける 柔軟い方法を考えることが重要

私は、日本と中国に多くの親しい友人がいますが、両国を研究し、私自身も体験してきた立場から、40年の日中関係の歴史をできるだけ客観的に見ていきたいと思います。

1972年、田中角栄が訪中して日中国交正常化が実現します。しかし、正常化を急ぐあまり、あらゆる条約が未調整のままスタートし、入国手続き等の問題が未解決のままでしたので関係はそれほど進展しませんでした。それから1978年に鄧小平が来日し、新日鉄の工場や日産の自動車工場を視察。新幹線で移動して松下幸之助に会い中国でのテレビ製造について協力を依頼します。こうして日本から中国に多くの援助が行われ、日本の小説やテレビ番組が中国で紹介されるなど相互交流が進められました。

こうして80年に日本で実施されたアンケートでは、78%が中国はよい国と答えていましたが、今では9割以上がよくないと思っています。この変化の要因はいろいろあります。中国は、89年の天安門事件の対応により各国から非難されますが、日本との関係改善に

努め92年には天皇陛下の訪中が実現。しかし、91年に冷戦が終結すると対ソ連において戦略的協力関係にあった日本を重視しなくなり、さらに90年代に自信をつけてきた中国は日本の援助や戦争被害に対する意識も変わってきます。98年に江沢民が来日しましたが、日本の国民感情を理解せず、良好な関係を築くことができませんでした。また中国とアメリカの緊張関係が続いたことは、同盟国の日本にも影響しました。それから、尖閣列島の国有化、靖国神社の参拝などで日中関係は冷えこみます。

もう少し相手の立場を考え、相手国を刺激しないことで関係悪化を防ぐことができたかもしれません。なぜなら国の指導者は強さを示さなければならず、相手側の圧力に対して簡単にイエスとはいえないからです。ですから、衝突を避けるために別の柔軟い方法をよく考えることが重要です。

中国側は、尖閣諸島の周辺から船や飛行機を減らすことで緊張を緩和することができます。また、中国では第二次世界大戦の映画ばかりが放映され、日本を軍国主義だと思いついて入っている人が多いので、私は日本の平和への努力、国際貢献について説明しています。

日本人は、第二次世界大戦について歴史的観点からもっと勉強するべきです。また、南京事件や慰安婦問題については、様々な数字

や割り切れないこともあります。殺したことや慰安婦自体は悪かったとして認めることです。その上で戦後70年間、日本は戦争が起こらないように願い、世界平和と国際交流に本当に貢献してきたことを説明し、今でもその気持ちを持っていると外国人に誇りを持って訴えることです。

<第二部 対談>



可能なら実現させたい 3カ国対話の枠組み

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」は、近代化を歩む国が共通して抱える環境問題や核家族化の問題などを、日本がうまくクリアし、克服していくことに焦点を当てた名著だと指摘する天見慧氏が、現在の日本と中国について質問。ヴォーゲル氏は、他国と比べて低い犯罪率、高い教育水準、格差の少ない社会など、日本の良さを強調しました。また、中国の新しい指導者については、広い人脈と腐敗問題への大胆な取り組みを紹介。会場から日中戦争の可能性について質問が寄せられると、同氏も含めた中国関係の専門家がその可能性は低いと考えているとの見解を示しました。



●コーディネーター

天見 慧

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

今後の日中間の関係について、天見氏が日米中のトライアングルでの対話の枠組みを提案。これに同氏も賛同し、「米国が中国に2国間での対話グループの結成を呼びかけ、そこで環境問題や省エネ問題を取り上げ、この問題は日本が強くて詳しいから、3カ国で一緒にやろう、という具合に進めていける」という可能性を語りました。

VOICE



▼1950年代から日本、中国、アジアをずっと研究されたヴォーゲル氏ならではの、歴史の流れを大局的に捉え、示唆に富んだ講演でした。今後の日中関係を考えていくための指針を示してもらいました。(右:内田良明さん、南区)▼学生時代に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を読みましたが、今日は世界の知性に触れられると思いいました。平和への貢献という言葉が心に残っていますが、これを世界に発信すべきですね。(左:内田美紀子さん、同)

学校訪問

■実施日/9月18日(木) 10:30～12:00
■会場/西南学院大学 西南コミュニティセンター



西南学院やRKB毎日放送と共催し開催した記念講演会には、大学生を中心に150名が参加。

ヴォーゲル氏は、講演の冒頭で自身の福岡との特別なつながりを紹介し、「初来日の翌年の1959年には、妻子と一緒に福岡を訪れて博多人形を購入し、その後も数年おきに福岡を訪れ、アジア太平洋博覧会も見学しました」と当時を回想。また、日本と中国を研究し、両国に多くの友人を持つ立場から、日中関係の好転を願って力を注いでいきたいと抱負を語りました。



続いて、福岡は日本でもアジアと最も密接な関係にあり、奈良時代からアジア各国と往来し、2,000年もの平和的な交流の歴史を持つ、と解説。あわせて、元寇や秀吉の時代、日清戦争や第二次世界大戦など、困難な時代があったことを認めるべきだと提案しました。

その後、過去40年間の日中関係を振り返りながら、日中国交回復の流れから鄧小平の来日、両国の経済・文化交流の歴史について様々なエピソードを交えて紹介。

現在の日中関係については、両国がお互いに心遣いをもっと持つことができればここまで関係が悪化することはなかったとの見解を示しました。

また、中国や韓国の若者が戦争や歴史について話しても、日本の若者は戦争や歴史についてあまりよく知らないということがあるとの事例を紹介し、国と国が良い関係を構築するには歴史を学ぶことが重要だと提案しました。

会場から、中国が進めている途上国との経済関係強化への影響についての質問には、「中国は現地の習慣や相互の信頼に配慮しないなど、国際的な資本の使い方を勉強していない面があり、途上国からの反発を招く場合が見られる。私はここ数年で中国も低成長になると予想している」と答えました。

講演終了後には、西南学院大学の学生1人にヴォーゲル氏の著作『現代中国の父 鄧小平』が贈られました。

